

エッセイ

## 花やしきのタネと大友のタカ

小田切 明 徳

### I はじめに

私的な回想から述べることをお許しください。この同志社大学人文科学研究所の研究会に参加することになったのは1970年のころの始めであった。きっかけは山宣研究をすすめて、彼の評伝を執筆中の佐々木敏二から誘われてこの共同研究をすることになった。この頃同志社は学園紛争中で烏丸通りから入った左右の主な建物の屋上には、煉瓦が積まれていた。研究会で杉井六郎先生をはじめとして多くの先達からご指導を得て、爾来40年余りの日々がたった。私は理系出身であり、文系の素養がなかった。高校生のころから歴史好きであったから、耳学問での出発であった。それなりに仕事分担としては重宝されたこともあり居場所があった。この辺りの経緯については、かもがわ出版の『性はおおらかに』（1989年）等で書いたが、短くふりかえっておこう。これからまず、山宣の若者向けの本を書こうとして花やしきの山宣関係資料の渉猟をはじめた。その中には安田徳太郎や、タカクラテル関連のものもあった。山宣と彼のファミリーの付き合いの広さである。安田の評伝をかきはじめてきたこともあった（『山宣研究』6号『花やしきの徳太郎さん』①～⑩）。しかし安田徳太郎（山本宣治の従弟で医師）本人の『思い出す人びと』を超えることができないことが分かり、これは断念した。タカクラの方は執筆を終え、学習の友社に出版の依

頼中である。私が山宣に関心を持ったのは、高校時代に彼を主人公にする映画「武器亡き闘い」を見たときであった。その後、烏丸通りに機動隊の装甲車が止まり、学生らと衝突が始まり警察は催涙ガスで応戦した。この頃、私の下宿は、左京区岩倉にあり叡電で通っていた。山宣に関心が強くなると、下宿を宇治の近くの伏見区に移した。土日に自転車で、出かけられ都合よくなった。花やしきの山宣の資料は、彼の告別式が執り行なわれた2階の大広間の倉庫にあった。そこへ、山宣の長男である英治さんに、連れて行って頂き説明をうけた。その日は花やしきに泊めていただき山宣の資料を貪り読んだ。やがて、英治さんの妹の治子さんを紹介され、資料室の本読みが終わると治子さんの部屋にお邪魔することになった。ここで私は山宣の資料ではわからなかった人間関係や当時の状況をお聞きすることができた。この話によって過去のことばかりでなく、山宣会とそれにつながる様々の情報をえたことになる。ここで聞いた情報については『山宣研究』（同志社山宣会、創刊号～15号）に記録していった。

## II 山宣の父母

山宣の父、亀松は京都の繁華街の四条麩屋町の金庫商の「奈良忠」屋の三男として生まれた。彼の生後に、父が死んだため、長兄がその店を継いでいた。次兄が東京の神田に「奈良屋」をひらいた。そこで亀松は奈良屋に奉公に出された。三男の気楽さと甘やかされて育てられたため先が見えず、その不満を酒と女に求めた。周りからは極道、放蕩者・「泥亀」と呼ばれた。そして時にはハワイまでも放浪の旅をしていたことを彼自身の後年の回想として、「若いころは極道をやっていた」と。だが、ある日のこと、日本橋の橋のたもとでキリスト教の宣教師の説教を聞いて感激した。そして持っていた煙草入れを川に投げ捨て、「まず禁煙だ」といい、「ああ、俺は何をしていたのか」と、大反省をしたのだった。

他方、山宣の母、タネ（種子、多年）は三条大橋西詰、老舗の足袋商・河内屋の長女として明治2（1869）年に生まれた。3人の弟と6人の妹がいたため、彼女は番頭の喜三郎と結婚し分家することになっていたが、彼は詐欺師に騙されて琵琶湖に投身自殺した。タネはその喜三郎の自殺のショックから癒されるとその後、初めて束髪に靴を履き、洋装で通りを歩き周囲の人を驚かせた。このハイカラな服装をするタネの姿をみた保守的な京都の人々は驚いて振り向いたという。京に帰った亀松は四條教会へ通い、そこでタネと出会う。明治16（1883）年の頃のこと。その頃の京都の信者たちは下京区の四條教会に商人を中心にした信者が集まっていた。明治10年代の欧化主義の流行で華やいだ若い女性の姿が目立ってきた。中でもタネはチョコカ（流行に乗るしりがる娘をいう）とよばれながら若い世代に人気のある商売を繁盛させていた。こうしてタネは教会に通いながらオルガンを習い、賛美歌の伴奏をするようになり、亀松は聖書の普及活動に熱をあげていった。こんな二人に、付き合うには時間はかからなかった。二人の親戚の中に「耶蘇の娘はよろしくない」、「極道の亀松には、」という声もあった。そこで二人は牧師に相談して親の反対を乗り切った。結婚式は明治21（1888）年1月21日のこと、当時の京都の地方新聞にも載り、この結婚は評判になったという。媒酌人が中村栄助で、井手牧師が挙式を進行した。結婚後の2人の仕事は、タネが始めたワンプライス・ショップはアクセサリーや小物を扱い、「花かご屋さん」と呼ばれて人気があった。ワンプライス・ショップと命名したこの店は変わっていた。京都の繁華街の新京極で、掛値なしの正札どりの商売は珍しかった。「まけぬといふたらほんまにまけぬ」と大書した看板の店である。そのうえ一番お客の多い日曜日に「安息日として休業いたします」であった。主人夫婦ばかりでなく、店の奉公人までうち揃い教会に出かけたから、周りの商人がおどろくのも無理のないはなしであった。こうしてワンプライス・ショップは順調に発展した。その1年後明治22（1889）年一人息子となる山本宣治が生まれている。翌明治23年第1回衆議院選挙では

亀松・タネの媒酌人であった中村栄助が議員に当選している。この亀松・タネらの教会のグループは、下京地区では家憲は禁酒禁煙、純潔な一夫一婦の励行など、封建的な妾を囲うことを自慢する家制度がまかり通る中で新しい息吹を起こしていった。この夫婦は懸命に働き、貯えができると息子の将来を考え、郊外に家を求め、宇治川上流に600坪を1坪1円で買った。雑草を刈り、整地して東京の向島の百花園を真似した庭園づくりを目指した。亀松は JR 京都駅の前前の東寺で毎月25日に開かれる「弘法さん」の縁日に出かけて、「おい、この花木を宇治の平等院裏の屋敷に運んどいてくれ」と店員に頼んだ。その後、数年すると時間をみて、宇治まで出かけて西洋の花木を樹木の脇に植えた。花が咲きだすと近所の人々から“花やしき”とよばれようになった。

### III 祇園の多佳さん

「月はおぼろに、東山、霞むよごとの、かがり火に、夢もいぎよう、紅ざくら、しのお思いを、振りそでに、祇園恋しや、だらりの帯よ」（長田幹彦作詩、作曲佐々紅華「祇園小唄」）、この歌がつくられたのが昭和5年、そのころ牧野省三が起こした映画会社マキノ映画で取り上げられ大ヒットとなった。といっても今日とは違っての無声映画で活弁という弁士がいたころの話。祇園新町白川の流れるところ、小さな石碑がある。この地で秋になると「かにかくにまつり」があり、芸子さん、舞子さんが多数集まる。白川の流れがさらさらと聞こえるあたりに古門前繩手に磯田多佳さんは住んでいた。お多佳さんは四条通り面した“一力”のお上さんがお姉さんであるから祇園では知らぬ人はいなかった。安田徳太郎にいわせれば丸顔で色は黒く美人ではないが頭がよく心のきれいなひとで、話し上手で博識のひとであったという。多佳さんは三条大橋の旅館“万屋”の岡本橘仙の支えがあった。祇園は格式が高く、一見さんは相手にされず、紹介状のない客は相手にされなかった。

大友・・・宇治のタネルートでの東京方面の文化人の京都への来訪についてである。明治44（1911）年、劇作家小山内薫、その妹の岡田八千代、作家の長谷川時雨が“万事屋”そして宇治“花やしき”へやってきた。そのトップバッターは長田幹彦であり、そこで書いたのが「尼僧」であった。タネは下宿の女将のように25歳の幹彦の面倒をかがいしくみた。長谷川時雨は、文中の芸子や舞子の京都弁は、祇園のお多佳さんのところへ出かけて1語1語チェックしてもらったと言う。これは、昭和4（1929）年9月の中央公論に「尼僧」と題し発表された。祇園情緒のお披露目と長田幹彦の文学的地位が認められた。続けて「雛勇」・「京極」が中央公論に載せられている。『祇園夜話』はヒットして23版も重ねた。吉井勇の短歌とともに祇園の放蕩文学がブームとなり、東京、大阪の文化人が大友におしかけた。

大正4（1915）年頃、夏目漱石が関西にやって来た。案内が朝日新聞の記者で大友の多佳さんのところに案内し、たいそう気に入ってお多佳さんと俳句を作ったりして、楽しく過ごした。しかし、その時の食べ物に当たったのか胃痙攣に見舞われた。そこで新聞社のスタッフは仰天して東京の奥方に電報をうった。そのため、漱石の奥方は京都に来た。多佳さんの申すには、文豪の寝ている部屋に進むと、「あなた何しているの、こんな汚らわしい家に泊まり込んで、、、」そのけんまくに文豪は布団の上に座り込んで、「はい申し訳ありません」と頭を下げたという。奥方は続いて合乗りの人力車を手配させ、文豪を着替えさせ、お多佳さんたちには挨拶もせず、ふたり仲良くお帰りになったという。

前年の1914（大正3）年の秋には、京都の南座に、松井須磨子の一座が来た。「カチューシャ かわいや、別れのつらさ、せめて淡雪とけぬまに、神に願いを、ララかけましょうか」この歌は大ブレイクした。このくだりについて安田徳太郎の回想である。その2人はオシドリで、花やしきにおいでになった。舞台上で見たチャーミングな姿ではなく、女優さんくさくない、あたりまえの女

だ。そこになんとか立派なところを感じた。私もひとつ素顔を拝ませてもらおうと思って、表の方へそっと行った時、伯父の亀松から「男子はあっちへ行け」とひどくどなられた。その時、「先生ハンケチ」と須磨子の甲高い声、するとやせた紳士がポケットからハンケチを出した。なんとも情けない島村抱月の姿がそこにあった。花やしきでは従業員一同は松井須磨子から直接歌唱指導を受けて、この歌を覚えた。

明治42年藪野棕十の『上方見物』（東京朝日新聞）、明治44年読売新聞で長谷川時雨の「明治美人伝」が出されて、祇園の磯田多佳と宇治花やしきの山本多年の紹介がされた。花やしきのタネも祇園のタカもこの世にいない。祇園白川あたりも晩秋になれば、紅葉した木の葉が流れえる頃、かにかくに祭りが行われる。集いに集まった人々は祇園とこの地を訪れた人々は頭をさげて静かに追想することになる。

他方、タネの住む宇治は青空にもとで宇治川の清流は千年の歴史を垣間見ながら大阪湾へ急いでいる。

## 追記

「思い出す人びと」は1976年に青土社から出たが、2001年に同出版社から『二十世紀を生きた人びと』（安田徳太郎選集）として、「思い出す人びと」諸論文や安田一郎氏の解説著作リストが付けられている。総頁数650頁で、まさに「20世紀に捧げる鎮魂歌」となっている。本題とそれるが自己防衛のみの注記をしておきたい。この選集の中で、安田一郎は「あとがきにかえて（607頁）」で、1955年に花やしきに入りに出入りしていた地元の中学教師が、安田の日記を発見しそれを「長い間それを秘して私物にして、その資料の一部を無断で発表した」とある。これは安田一郎さんの勇み足である。

まず、安田徳太郎日記も『山本宣治関係資料目録』（上・下二冊）に基づき

資料館が責任者となって貴重な資料大切として保管されてきたので、誰も資料室の資料を私物にできない。一郎氏からは「昭和62年に遺族に請求権があるから返せ」とせまられた。佐々木敏二館長と相談してやむなくその要求に応じた。こうして日記は遺族のもとに返還された。

さらにいえば、安田徳太郎日記はすでに1974年出版の佐々木敏二著『山本宣治』で使われていたのである(209頁)。もう1つ、加えて安田一郎さんの妹の朝子さんの書かれた本『父母の青春』にも一郎さんと同じトーンで安田日記の事が触れられている(33頁)。それには「この日記は昭和になって山宣研究者から父に報告され、それらは生前1度も父に見せられることなく、昭和58年に父はなくなり、その研究者によって2回にわたり、その1部が公表された」とある。私の感じでは、一郎さんの文面よりも配慮ある文面に思えた。生前、東京白金台のお宅に伺い、徳太郎さんの奥さんの光代さんからお茶をご馳走になったことを思い出す。このとき、本棚に万葉集のレプチャ語の訳がたくさんあったのが印象深く思い出される。

(第18期第1研究会による成果)